

現実主義 (1) 私は真の現実主義でありたい

□ 私は一番尊いものは現実だと思えます。私たちにとつて一番確かなことは生きていくということ。だからただ生きていたらよい。強く美しく楽しく現実に生きていきたい。未来とか、人生とか、苦しむのは弱い人間のすることだ。

× そうでしょうか。私もほんとの意味の現実主義者ですけれど。

□ 未来だとか、悲観だとか、煩悶だとか言っている者は、体が弱いか、心が弱いのか、思うように成功出来ないとか、貧しいとか、そんな結局人生の落伍者が言っている言葉に過ぎないのだ。その悲観から何物も出て来ないじゃないか。

× そうですかね。そうかも知れません。

□ つまり人生は第一が金だね。金さえあれば何でも出来るじゃないか。もし煩悶すれば如何にして金を得るかが問題でなければならぬ。人生富を作れ、学問をせよ。地位を得よ。何と言つても事実が証明しているではないか。死の、悟の、救済のと言つて男は、貧しくて社会の競争に負けて哀れな様子で暮すじゃないか。僕たちはとにかく愉快に暮しているじゃないか。僕たちにとつてこの生きている人生の今ほど有難いものはない。

× 一応はそれも有難いですな、学問もいいですな。出世もいいですな。けれどあなたは深い自信があつて、言いかえると、ほんとにあなたの心に偽ることなしにお言いますか。

□ もちろんです。私たちはただ自己の信念に生きていきたいのだ。僕たちは常に強い信念によつて強く生きる人を要求する。

× あなたは信念に生きると言いますね。その信念とは如何なるものです。

□ 信念とは解っているじゃないか。

× どうわかつていますか。

□ 自己を信ずる力、自己の正しさを信じ、自己の主義に生きる僕自身の心だ。

× つまり心に主義という何かを立てて、それによつて生きるのですね。その主義とは何です。

□ 主義は人によつて異なるさ。だから一口には言えない。

× あなたの主義は何主義です。

□ 僕は現実主義だ。この体のつづく限り、この心のある間、僕は努力する。勤勉力行だ。

× すると勤勉力行主義とも言えますね。

□ もちろんだ。汗の生活位人生で尊いものはない。汗して食う、これ位人間らしいことはないではないか

× すると主義も一つではなくていくつもありますね。時によつて変わるわけですか。

□ 変るのじゃないけれど、つまりは如何に人生を強く美しく楽しく生きるかと言うことにあるのだ。あなたにも主義があるだろう。

× 私には主義とか信念とかはありません。

□ 無主義位弱いつまらぬことはない。確固たる信念のない者に何が出来るか。

× 私にも主義のあつた時代もありますが、どうもそんな角張つた荷を負つていてもそれはほんと思つたので、主義とか信念とか肩のこることは止めました。

□ それで世の中が渡れるか。

× 渡れると思います。

□ たとえば、君がたくさん他人と共に職をとつている場合に、皆が異つた色々な意見で反対した時、君はどうするのだ。又ある人が「行かう」と言えば「はい」と言つて行き、ある人が「来い」と言えば「はい」と言つて行くのか。

× そりやその時になつて見ねばわからないことです。そんな事のない今、反対すればそれにつくとか、反対されても私の思うようにしたいとか、それはその時でないとどちらとも言えませぬ。主義がないと言うことは、他人の思い通りになるといふことは違ふ。主義とか信念とか言う人、即ちあなたのような人には、その主義とやらに賛成する人が立派な人物に見えるでしょう。

□ そりやもちろんさ。自己の信ずるところ断々乎として実行する。反対すればよく言つてやる。そして自分の意見が通るまでやる。

× 心の弱い者はあなたの前では黙つています。心にはほんとの血の通つている人間は不平を言います。あるいはあなたの前を去ります。ただずるい世間師があなたに常に賛成してあなたの御引立を蒙ります。

□ けれど僕の主義はどしどし出来て、皆従うではないか。

× 心からの従い方ではありません。形ばかりであります。愛のない所にどうして心服があらましようか。

□ あなたは現実主義だと言つた。ほんとに現実主義とは如何なることだ。

× お答えする前にあなたに問います。いつたいあなたは今日平気で暮せるのは何故ですか。

□ それは、何もわけはない。

× けれど、それでは明日が無くても今日は平気で暮せますか。

□ 明日のあることはよくわかつているではないか。

× そうでしょう。明日は今までの考え、経験によつて確かにあると思うからこそ今日が平気なのでしょう。けれど明日がないことがありますよ。

□ 何故だ。

× 人間はきつと一度明日のない日があります。死の日がそれです。あなたが明日があると言うことは、「明日があるとして」という仮説の上に立つてのことですね。

□ けれど死などは僕たちの考えるべきことではない。明日は僕たちには必ず存在する。

× ではあなたが今日現実主義だと言えるのはやはり明日があるからでしょう。ではもし明日が無ければ今日のあなたは立つても坐つてもいられない訳ですな。

□ それはそうだ。けれど明日など考えない。
× では今一つ問います。あなたは今安心してこの部屋にいたることが出来るのは何故です。

□ それは、この部屋に信頼するからだ。
× そうでしょう。一時間後に天井が落ちるとか、床が落ちるとか、こんな心配がないからでしょう。とすれば一時間後も考えに入れてあるはずですね。もし落ちるとすれば、平気ではいられないからね。

□ もちろんだ。
× それではやはりあなたも一時間後とか、明日とかと、先のこと即ち未来を考えていることになりませぬ。

□ 未来とかは聞きたくない。
× 聞きたくなくても未来があると信じていることに間違いはない。よくお聞きなさい。人間は先もあるとしなければ安心出来ないのです。あなたは、現実主義だと言うけれど、それは、ただ言っているだけで、一時間後にでも大事があれば安心の出来ないところの、いい加減な現実主義ではありませんか。

未来から来る光

人間は皆未来を信じ、未来から来る光によつて現実を照されて生きて行かれるのです。「明日はあるとして」などと、そんな確かでないことを根拠とせず、明日のあること、一年、十年、五十年、百年、万年、墓場の向うの世界から来る永遠の光によつて今日を照されて、絶対の安心に立った現実でなければならぬ。永遠の彼方から来る無碍光は、決して「ありとして」という仮定を許さぬ。絶対に存在し、永遠の未来から現実、そして久遠の過去に流れ去るのだ。その光に照り輝く現実のみ、ほんとうに力強い現実である。私たちはたくさん願いがある。やむにやまれぬ念願がある。その念願は今日そして明日、そして永遠の未来で全部完成する。

□ そんな生活は何故から来るのです。
× 信仰から来ます。

□ 信仰とは未来とか淋しそうなことを考えてすることではないか。
× 未来を考えます。けれど、生きたい。生きたい、永遠に生きたい。その生きたい心の外にあるではありません。

そうだ、一切を提げて永遠に生きる。地上の人間は、ほんとに、罪悪にも、死にも、人間苦にも感ずることの出来ぬ、無量寿、無量光のみ親の救いを信ぜねばならぬ。これがほんとの生き方だ。

今こそ歌え。高らかに、現実高潮の歌を。

今こそ働け、汗と血の続く限り。

今こそ流せ、衆生済度の涙を。

(暁の鶏の音を聞きつつ、八日夜、広島にて)

歡喜

冷い、清い空気に
紅い、熱い血が
高鳴るよ！ ハートに
今日も、今日も
恵まれた一日が
ああ、太陽が燃える
私の涙が光る。
腕をふつて見る、
一度、もう一度

願生の私！

私にも、

おゝ、この願いが

進もう、進もう

法蔵比丘の精進の姿

立て！ 歩め！

合掌！ 合掌！

生きる者、

永遠に生きる者の歡喜よ。

本願力に乗托して

いや高き聖親鸞

雪が降って寒い風が吹いています。又今年もお逮夜を迎えました。来る年来る年
一年ごとに、仰げば仰ぐだけ偉大で、拝すれば拝するだけ崇高で、聞けば聞くだけ懐
しく、掬めば掬むだけ深いのは、聖親鸞でございます。

今から昔七百年、鎌倉時代に私たちは、物質によつて立つた大きな柱と、靈によつ
て立つた大きな柱と、二つの違つた極端な人間を見ることが出来ます。源頼朝は肉の
柱であり、聖親鸞と聖日蓮とは靈の柱であります。

人も知る通り、頼朝は征夷大將軍、天下の政治をその手の中に握つて、上御一人を
お除きしては、誰も恐れない権力のあつた人であります。けれどそうして天下を取つ
て、権力を握るためには、あの功のあつた弟の義経をも殺さねばなりません。また、
悪い心のない弟の範頼をも殺さねばなりません。そうしてまで得たその権力、
その強さ、その仕事を、今日誰が有難いと思つて感謝しているでしょうか。物質の榮

えはその時だけです。けれどちょうどその時代、破れた衣に草鞋をはいて、乞食のよ
うな生活をしつつ、信仰に生きた聖親鸞の北国への流罪や、叡山南都の悪僧たちの激し
い迫害の内に生きたその一生は、あまりに淋しい、あまりに貧しいものでございまし
た。

聖日蓮が瓦の飛ぶ、石の投げられる、その中に立つて、『法華経一卷』を取って、「念
仏無間禪天魔」と雷のような叫びをあげ、『立正安国論』を説いて、国難来を誡めて、
あるいは流され、あるいは首の座に坐られたその一生は、あまりに多難であまりに苦
しい、物質にかけては諸にならぬ貧しさであった。けれど、今日までその光は消えな
い。否、汽車走り、飛行機飛ぶ文明の今日、いよいよ新しくその光を増し、掬めど尽
きぬ泉のように、私たちに生命道の糧を与えるではないか。

親鸞聖人は現代人の生命の光である。探れど探れどその奥は知れず、如何なる哲学
を持つても解くことの出来ぬ偉大は聖人の信仰であります。学者もその信仰を研究
して驚異の讚嘆にペンを棄て、人生を煩悶し悲観する青年も、聖人に導かれて救われ
ます。読めど読めど飽かぬものは歎異抄で、味わえど味わえど尽きせぬ味がありま
す。血と涙で綴られ、人生の奥底に徹したものは、教行信証であります。そしてそれ
が若き者の聖典であります。私たちは「本願を信ぜんには他の善も要にあらず、念仏
にまさるべき善なき故に、悪をもおそるべからず弥陀の本願をさまたぐるほどの悪な
き故に」と本願に乗托して、絶対自由の白道を精進して生きられた聖人のあとをその
ままたどらねばなりません。

欣求に燃える全生命

私たちは一応金の有難いことを知っています。そしてそれを頼りにします。けれ
ど、もつともつと深く考えた時、それが永遠の力ではないことに気付きます。学問
も、親も、兄弟も、妻も子も、何物も最後まで力にはなってくれないことに気付いた
時、私たちは何を力に生きたらいいか。

何を頼りに生きたらいいか。

この力の知れないかぎり、私はたった一日でも生きられない。寂しい！ 悲しい！
何を見ても寂しい。何を聞いても悲しい。私は生れたことを呪う。生きているこ
とを呪う、このままで私の生命全体を捧げることの出来る、私の生命全体を托すこと
の出来る、永遠に消えない力が出てくれない以上、私の生きていることは何のことだ
か解らない。死んでも死にきれぬ。飯を食うことすら呪わしい。

ああ生命の力よ、救ってくれ。この力の体験出来ない以上、他人を教えることも無
意義である。千万言を費してしゃべったとて、私の言葉の中に何の力があるか。こ
の力の得られない以上、私の言っていることは要するに蓄音機のそれに違いはない。
文明が進んで鉄道が網のように敷かれても、金殿玉楼に住まうとも、私は決して幸福
ではない。もしこの願求が成就するなら私の一切を捧げてもかまわない。火の中に
入れられてもいとわない。

貧しきの故に泣いているなら金をやつたら治りもする、友に別れた悲しみは辛いこ
とかも知れない。けれど日が立てば忘れましょう。死に別れた親、若死した子供、恋

人に棄てられた悲しみ、それは人生の最大な悲痛だろう。けれどそれにも増して苦しいことは私の生命の孤独なことだ。

地上全て十六億、それら全部の人が利に走り、名に憧れて暮そうとも、私一人はこの願求を追わねばならぬ。地上の如何なる宝を持って来ようとも、私のこの淋しき、悲しさを救うことは出来ぬ。(こんな求めに泣いた大正四、五、六、七年が今更懐しい。)

真実な求め

二十年の間、夕べの螢に旦の雪に、高僧知識について「十乘三諦の月観念秋を送り、百界千如の華薫修歳を累ね」られても、自力の小路によつて安心立命なさることは出来なかつた。当時聖人は、少納言範宴の君、学徳共に高く聖光院の門跡に進み、光栄ある僧都の官に進ませられていたのである。けれど何を以つてしても置きかえることの出来ぬ聖人の生命の前には、どうしてそんなものが有難かつたでしようか。黒谷法然上人の吉水の禅堂に入らせられんとする時、小幡民部は聖人の御袖を押えて、「何故さように御性急におわするぞ、やがては僧綱の選挙にも上らせ給うべく、紫衣紅衣の官職も瞬く間に思うに任せる幸ある御身にては候わずや。」と申しました。まことに今二、三年も叡山において遊ばしたならば、叡山座主の地位も得られ、高僧智識として敬まわれなさることが出来たのです。

けれど救われたい願いの前に、門跡が何でしょう。座主の光栄が何でしょう。紫の衣、緋の衣が何で生命を救いましょうぞ、何をもつてしても置きかえられぬ、何をもつても妥協の出来ぬ真実の願求があつたればこそ、法然様の前に出られ、立所に絶對是認、凡夫直入の信心を決定せられたのである。

平気な人より苦しむ人の方が好きです。笑っている人より泣いている人が好きです。何によらず出来上つたものよりも、創造されて行く時に価値がございます。小さい事でもそれが創造される時には、人は深い精進を続けなくてはなりません。人間一人生れて出る時、産み出す母親は陣痛に泣かねばなりません。人間が何事かを育み出すにも、そこには悲痛な涙が流れます。

人間一人が信仰に入ることほど大きなことはありません。三千大千世界が鳴り動き、無量の諸仏諸神は頭を下げて敬伏し、悪魔外道は立所に消え、地獄も鬼も火にあつた氷のように無くなつて、たつた一人、無碍の白道を進む私のみが残るほどの大事実でありますもの。悲痛な涙も、人生全体を呪うほどの救われる者の苦しさがなくて、どうして真実の信仰が湧いて来ようぞ。どうでもいい信仰なら、此世も来世も二股かけて信じておいたら損にはならぬと思うほどの安っぽいもうけ主義の信仰なら、どんな風になりと求めることだ。墓場の向うの世界に横たわるあの暗黒が気にならぬ者、罪を抱いて痛む胸の苦しきの知れない者、生と死を分けて考えられる者たちには、信仰はそもそも不必要な事柄である。

商人も算盤を置いて考えよ。学生も教科書をふせて瞑想せよ。出家も説教やめて胸に問え。教師も教壇を下りて言っていることが充実した生命からの叫びか、設備も施設も教授も、尽きぬ愛の泉から出たか猛省せよ。そうして人間は皆一度、ほんとに

生き返つて来ねばならぬ。そうして真実に求める者にはきつと、学識の如何を問わず、若者と老いたる者とを問わず、必ず真実の生命が見え出して来る。

泥中の蓮

「まだうら若き女学校出の彼女が、家出して尼になろうと決心したには、こうした複雑な事情があつた」というような記事が一月十日頃の新聞に出ました。

○子様、あなたはまだお目にかかつたことはないけれど、私たちの同胞でございませぬ。山中等女学校を優等で卒業なされた美しい優しいあなたが尼になろうとまでなさつた言うに言われぬ御身上、万斛の涙を捧げてお察しいたします。幼い時にはお母校を失いなされたあなたがた御姉弟は、抱きあつて人なき場所で泣くことも少なくなかつた。まして目覚めんとするあなたが、自宅に抱えた多くの娼妓が日夜肉の切り売りの悲惨な状況、色餓鬼共が日夜この娼妓に戯れる馬鹿騒ぎなどを見て、教科書にのつていふことと実社会の裏面とは大いに矛盾していることを知り、在学中から哲學的の書物を読むようになると同時に、女郎屋などは普通人のすべきことではないことを悟つてお父様に説いたあなたは、如何に人生のこの汚さと、身の上の不幸をお嘆きなされたことでしょうか。

○子様、たとえ願望は成就されなくても、汚れた現実、不満足な環境を否定することを忘れてはなりません。そしてその否定には自暴自棄や妥協や墮落があつてはなりません。欣求浄土の一途の願望が常に燃えていなければなりません。そうして忠実な生命の自由な遵奉者として、その願力を失つてはなりません。あなた一人の清く成りたいの涙は、あなた一人の力弱い涙ではありません。

来るべき人間解放への、千万人によつて背後を守られた力強い涙です。泣いてもいい、けれどもそれはあきらめの涙ではありません。どうしても成就したい、どんなにしても止めることの出来ない、立たん、立たんとする涙でなければなりません。深い生命道を体験した人たちは、小さな幸福な身の上ではなかつたのです。逆境こそは私たちに与えられた生命への関門であります。現実否定の上に立たない者にどうして現実肯定の真実道がわかりましょう。私はあなたに心からの感謝の涙を捧げます。私たちの同胞に泥中の蓮のようなあなたがあつたことを心から感謝します。ここに出した罪を免して下さい。

無限の世界

日暮方の町（広島市）を眺めていますと、たくさんの方が通ります。貧しそうな人、富んだ人、学生やら、着飾つた若い女やら、車を押す女やら、職工や車屋や、自転車乗りや、魚売りや、ガラガラ雑多な音を立てて通ります。チラチラ目に入る人たちが

みな懐しい気がします。皆、みな、一つづつ願いをもってセッセと寒い暮れの町を急いでいる。皆なにかの願いをもって働いているあの姿を見ている私には一人の悪人も存在しない。「あのままでもいい、あのままでもいい。」と涙ながらに抱きたもう慈悲のみ親の温きみ心が涙ぐまれます。

あの人たちと同様に、草深い山の中に住み、誇るべき何物もない私たちは、一生涯、有名でもない、楽にもない、華やかにもない。けれど、掘れ、掘れ、そこで、たましい霊の世界を。掘れど掘れどつきぬ深さは霊の世界である。たとえ苦であろうとも、涙であろうとも、無限に広い精神生活にお入りなさいませ。そこには火にも焼けぬ、金でも買えぬ、正宗の名刀も切ることの出来ぬ、金剛の確かさを持った絶対自由の世界が御座います。大愛を信じ、大悲を信ずる者には、この無限の世界が与えられます。

如何に修養が出来た人だとして、地上を足の離れぬ限り、苦しい時には苦しいのです。悲しい時には悲しいのです。腹が立つ時にはどうしたって仕方がないのです。けれどもそのままを本願の船に乗せるのです。(否、乗せられているのです)

私は何という恵まれた人間でしょうか、実を申せば一日起きて働いている間、忘れていた時がないほどです。と言って心に何の重荷もありません。怠ける心が起きて来ます。「おお、このずるい怠け者がそのままに」と思わせられると、悲しい心がそのままに違つた心になられます。苦しい時、情ない時、馬鹿にされた時、恥をかいた時、私の心はそのままに苦しみもし、悲しみもしますけれど、そのままの中に、ゴム鞆を押さえたように、ウンと力を出して下さるお光をどうしましょう。幸せな日、物事の面白い日にはことさらです、淋しい日にはなおさらです。

広島に居て朝に夕に私の周りは何事につけ喜ばせずにはおかないのです。こんなに続く私の喜びが明日からは消えるかも知れぬ。けれどこのうるんだ温い心の歓喜の消えた空つぽの心をいただいて苦しむ日には「ああ、この空虚の心をそのままに」と喜ばせて頂くことでしよう。

悪なればこそ救いがある。迷えばこそ救いがある。腹が立てばこそ救いがある。冷たい欲がおこればこそ救いがある。悲しければこそ救いがある。善は救われなくても善なのだ。正しい者は救われなくても正しいのだぞ。悪なればこそその救いだぞ。「私は善人だ、私は正しい。私は迷っていない。」と誰が言えようぞ！

今！ 今！ 今こそ救いを信じよ。敢えて言う。本願力に乗托せることを信じよ。本願力に一切をあげて飛び乗れよ。

人間はいいかげんの所で、もう一度自分の心を見つめたがいい。寝間静かなる所、暗がりの何かしら心細さはないか。誰に頼みようもない苦悶はないか。人に向つてはどうでも言えよう。欺くことの出来ぬ自分の心を何とする。ほんとに何の苦もない人もあろう。けれどそれは本物ではない。無自覚ののんきなのだ。続きましたら御けつこう。否、続くかも知れませぬ。けれどそれは恐しい、大変です。さゝ、目を覚めたまえ。